

令和 2 年 5 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K00717

研究課題名（和文）19世紀英国における官立デザイン学校の素描教育に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on Drawing Education in the Government School of Design during the 19th century

研究代表者

竹内 有子（TAKEUCHI, YUKO）

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：80613984

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：英国で国家が芸術教育に関与したのは、西欧諸国のような美術アカデミーではなく、官立デザイン学校であった。同校は、産業振興に役立つデザイン教育を目的として1837年に創設された。19世紀後半、同校は先駆的な教育体制を構築し、サウス・ケンジントン体制として世界に知られた。本課題は、同校の素描教育の形成・デザインへの応用・英国外への影響を調査した。そして、教員がデザイン概念をどう捉え、それがカリキュラムにどのように反映されたのかについて明らかにした。同校の教師陣は美術とは異なる教育を追求し、植物学に基づき植物を用いる、独自の素描指導法を創出した。これは北米に伝播し、日本の高等デザイン教育に導入された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題は、公教育制度が拡充されてゆく近代を対象とした。芸術ジャンルが専門化し、デザインがアートから自律した時期でもある。デザインとは何かという問いは、芸術教育史に新しい視座を与える。官立デザイン学校に係る日本の先行研究は「図画」＝美術という局所的な観点から成立しており、デザイン高等教育における教育法の分析は考慮されていないからである。また芸術史において「素描」の概念は重要であるが、産業革命以降の素描概念について論じた研究は少ない。本研究は、芸術教育において素描が重要視されどんな展開を遂げたかについて、諸外国との比較を通じて考察を行った。同校の意義の解明は、芸術文化交流史の発展にも資する。

研究成果の概要（英文）：Britain has a unique art education history, which is very different from that of the Continent. Major European nations established their art academies as state-funded schools focusing on fine art. In contrast, the British Parliament authorized the formal establishment of the Government School of Design in 1837. It aimed to uplift the artistic quality of manufactures and to provide “design” education for British workers. The school elaborated the pioneering educational system, called the “South Kensington system”, in the latter half of the 19th century. This study investigated the formation and development of design education, practices and its influences over America and Japan. Also, it examined how it reflected the school curricula and the practices of the leading masters. They made effort to differentiate the drawing education from the Royal Academy. Finally, the school invented the original instructional method based on botany and used plants as their drawing motif.

研究分野：デザイン史

キーワード：デザイン教育 デザイン史 美術教育 日英芸術交流 アートマネジメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「官立デザイン学校 Government School of Design (1863年に National Art Training School と改称、現在の Royal College of Art) は、産業振興に役立てるためのデザイン教育を目的として 1837 年に創設され、各産業都市には地方分校が設置された。1852 年以降、政府の文官ヘンリー・コール(Henry Cole, 1808-82)と仲間たちは、サウス・ケンジントンの地で三位一体(実用美術局/学校/付設博物館 現ヴィクトリア&アルバート美術館)による先駆的な教育体制を構築した。同校の所在地の名称が全国・世界に広まった「サウス・ケンジントン体制」とは、図案形成のための幾何学的な線描を指導の根本とし、素描から絵画・モデリング・デザインコースへと至る「23 段階の国定カリキュラム」を指す。

このサウス・ケンジントンの教育法の世界的広まりは、米国・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの事例に続き、近年はとりわけポスト・コロナの文脈から、ブラジル・インド・南アフリカ・エジプトの非西洋圏における影響関係が報告されている。また日本における先行研究では、明治期の図画教育書はサウス・ケンジントンの指導書を全面的に導入せず、絵画の写実性を好む「独自の選択」をしたため、「同校の影響は殆どない」と結論した。総じて、同校の素描教育に対する先行研究は、「想像力や創造性を育成する観点に欠如した、手本を繰り返し模写させる厳格で無味乾燥な教育法」と見なしてきた。

2. 研究の目的

官立デザイン学校の教師陣が美術アカデミー(ロイヤル・アカデミー)とは異なる素描教育法を採用するに至るまでの背景を再検討しつつ、同校の教育カリキュラムにおける素描の教授内容の源泉と独自性を明らかにする。

主要な地方分校での教育法とカリキュラムの実態を解明し、各校の教師陣のデザイン技法書およびデザイン実践を精査する。

同校を卒業後に米国へ渡り、他国との懸け橋となったデザイン教育者、ウォルター・スミス(Walter Smith, 1836-86)のマサチューセッツ師範美術学校での仕事を調査することにより、「サウス・ケンジントン体制」の世界的波及および近代における素描教育の意義と展開について総括する。

3. 研究の方法

官立デザイン学校の素描指導の形成、学習の応用と実践、他国の受容について、三段階で調査を行った。

19 世紀英国の素描指導書とその系譜・影響関係に関する調査：官立デザイン学校の教師たちが影響を受けた素描指導書の文献を精査し、同校で教授された素描法の意義を美術アカデミーとの比較等より考察した。

1) 1835 - 36 年の英国下院議会文書におけるデザイン学校関係者の証言・記述を中心に調査した。この「諸芸術と製造に関する特別委員会」は、英国の産業製品の質を担うデザインと芸術教育の必要性を検討し、ロイヤル・アカデミーの体質と効果を調べるために行われた。同時代にデザイン教育が必要とされた、経済・社会文化・美学的要因について調べ、美術アカデミーとの素描指導法の差異化について考察した。さらにはドイツとフランスの教育カリキュラムについて、議会文書の報告を通じて精査した。

2) 1849 年「デザイン学校に関する下院特別委員会」、1864 年「芸術学校に関する下院特別委員会」の文書における、コールの仲間たち・学校関係者による記述を調査し、同校にどのような反省点があって改良を行う必要があったのか、体制構築後の問題点等について検討した。加えて、コールたちが発刊したデザイン啓蒙雑誌『ジャーナル・オブ・デザイン』のデザイン学校に関する記事等の関連著述も調査を行った。

3) 同時代に出版され、同校(現在のヴィクトリア・アルバート美術館内の国立芸術図書館)において、歴史的に集められたマニュアル類の目録を調査し、工学・機械技術に類する素描指導書、美術(人体)素描指導書と、官立デザイン学校関係者の指導書・公文書(規則集等)を比較検討した。

英国内の地方校における素描教育の指導書・実態に関する調査：主要な地方都市における素描教育システムの受容、教育関係者の素描指導書の内容リスト作成、学校の教員・学生作品の分析を行った。

1) マンチェスターとバーミンガムで教えたジョージ・ウォリス(George Wallis, 1811-1891)、バーミンガムのフランク・ジャクソン(Frank G. Jackson, 1861-1904)、リーズのウォルター・スミス、ランベスのジョン・スパークス(John Sparks, 1833-1907)、ダブリンで教えたジェームズ・ウォード(James Ward, 1851-1924)のロンドン本校時代等の足跡と業績を調査した。

2) 上記と並行して、各学校のカリキュラム・回覧・学年歴等の実態を明らかにすべく、英国で現存する一次資料の調査を行った。

3) 上記に基づいて学校の教員・学生作品とノート等の分析を行い、素描教育との照合を図った。

米国・日本における受容と展開に関する調査：公教育の素描法について経由地である北米の事例を通じて調査を行った。特徴となる植物素描の方法論について、日本の美術・デザイン関係者

たちの受容・影響関係について考察した。

1) マサチューセッツ州議会が、スミスを招聘し、サウス・ケンジントン体制を導入することになった経緯を、カナダへの影響も含め整理した。そのうえで、スミスのデザイン論・素描教授法に関する著述を調査した。スミスによる米国の教科書・素描指導書等と英国の教科書類を比較し、白濱をはじめ、日本の教育関係者に米国が与えた直接的影響と間接的影響について考察した。

2) 官立デザイン学校出身のクリストファー・ドレッサーのデザイン論は、明治期の政府高官・在野の画家たち・高等デザイン教育者たち(東京高等工業学校、京都高等工芸学校)にも受容された。ドレッサーの訪日以後、外国に留学したデザイン教育のパイオニアの諸活動・海外のデザイン書の流入を通じて広まった、サウス・ケンジントン方式に由来する「便化」の受容に関する調査を行った。

4. 研究成果

【成果】

19世紀英国の官立デザイン学校が構築した素描教育の形成過程・デザインへの応用と展開・英国外への影響の実態について、同校の有した課題「産業デザインが新ジャンルとして自律するにあたり、美術とデザインの区別が著述とカリキュラムを通じて理論化され、指導法に反映されたこと」、素描教育の独自性「美術アカデミーと異なる、植物学を基にした新しい図案教授法の確立とその意義が、同校関係者によるデザイン理論に結実したこと」、展開の意義「デザインの語義が「素描」から「デザイン製品」に拡大され、同時代の教育に長らく必要性が指摘されてきた「デザイン原理」の新しい意味性が教義の中に明文化されたこと」を明らかにした。

創設初期に英国の官立デザイン学校関係者が、ドイツとフランスの諸学校の比較を行った後、「ドイツの実業学校の教育方法(職業教育)」を採用したことは、美術と産業デザインが未分化な時代において、国家が専門的な「産業デザイナー」の育成を目指したことを明確に示している。先行研究では、この同校設置の本来の意味合い、ひいては「デザイン」の語義と変遷が曖昧なまま記述されているために、その教育が正当に評価されていない。

同校の素描教育の特徴を形作った「幾何学性を基盤とする外形線の素描」は、産業従事者に機械生産の理解を促すよう企図され、量産されるテキスタイルやセラミック・タイル等に向く「パターン・デザイン」製作を指導するものであった。デザイナーには、製品に適用する装飾の形態を客観的に描写する技術とともに、独創的な図案を生み出すための自然研究(装飾モチーフとなる自然の研究)が要求された。

19世紀中葉に整備された、ヘンリー・コールと仲間たちによる体系的なカリキュラム(サウス・ケンジントン体制)は、素描から絵画・モデリング・デザインのコースへ到達するという、旧来のアカデミーの美術教育とは全く異なる「デザイン教育」を前提としていた。ここでコールたちが案出した新しい装飾デザインの教授とは、人体の素描ではなくして「植物」の素描によって、絵画のように再現的ではなく、自然を抽象化する方法であった。

だが、同校を卒業し教員にもなった産業デザイナー、クリストファー・ドレッサー(Christopher Dresser, 1834-1904)は、その教育が「素描」(正確に手本を模写するスキル)に偏重していると批難した。彼は、植物形態学の研究を糧にして、デザイン概念を深化させた。彼の理論によれば「デザイン」とは合目的性に準じた、「構築性と抽象的装飾との統一体」である。ここで、科学性(工学)と芸術性(装飾)の融合、つまり産業デザインの現代的な意味性が完成された。のみならず、ドレッサーは以下の「デザインの原理」を完成させた。(「合目的性」、「機能を考慮した素材」、「形成に適した素材」、「曲線の美が精妙であるべきこと」、「均整も同様に精妙な性質であるべきこと」、「秩序の原理が装飾構成にあること」、「装飾における部分の規則的な反復性」、「装飾構成における交互の配列」、「植物モチーフを模倣的ではなく抽象化すること」)

他方、米国への展開については、公文書に表れる「industrial drawing」という英国とは異なる特徴的な呼称の通り、美術と産業デザインの違いがより厳格に線引きされた。相違点は以下の通りである。米国の場合は、より実業に根差した機械的(製図的な)素描が初等教育として最重要視された。英国と米国の専門4コースの概要は近似しているものの、前者が「産業デザイン」の専門性のある意味で到達点としていたのに対して、米国では産業デザインは「絵画」コースの中に含まれ、「建築」と「彫刻」等の構築芸術のコースと並列化された。また英国の教育と同様に、植物を用いた素描の方法論「conventional treatment」が踏襲された。モデルの植物を写實的に描くのではなく、抽象的な形態に描き替える方法である。

マサチューセッツ師範美術学校の日本への影響関係において、間接的だが早くは、宮本三平『小学普通画学本』乙乙部第二(1878年~)によるW・スミスの教科書からの引用図がある。他方1905年、米国の同校に留学した後、普通教育における図画教育に携わった白濱徹(東京美術学校教授)は、『新定画帖』に図案の構成を含めているが、英米のサウス・ケンジントン式の素描法の影響は薄く、むしろ小室信蔵(後述)に依拠している。同方式の直接的な影響は、手島精一・小室ら東京高等工業学校の工業図案科、さらに京都高等工芸学校等で導入された図案法「便化」「草花模様化」に顕著に見られる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 竹内有子	4. 巻 69 (1)
2. 論文標題 クリストファー・ドレッサー再考：そのジャポニズムとモダニズムの関係をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20631/bigaku.69.1_109	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 竹内有子	4. 巻 72
2. 論文標題 クリストファー・ドレッサーの装飾デザインにみる色彩論の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 竹内有子	4. 巻 71 (1)
2. 論文標題 デザインと素描 官立デザイン学校におけるデザイン概念の変容ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 竹内有子	4. 巻 -
2. 論文標題 クリストファー・ドレッサー博士の子孫について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 郡山市立美術館『クリストファー・ドレッサーと正倉院宝物』展カタログ	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹内有子
2. 発表標題 デザインと素描 官立デザイン学校における素描教育の系譜
3. 学会等名 第69回美学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内有子
2. 発表標題 クリストファー・ドレッサーの装飾デザインにみる色彩論の展開
3. 学会等名 第234回意匠学会研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内有子
2. 発表標題 クリストファー・ドレッサーのジャポニスム序説 旧蔵資料に着目してー
3. 学会等名 第240回 意匠学会研究例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----